

想いと繋ぐ

～事業承継コラム～



サブマネージャー
(親族承継支援担当)
吉村 文男

第5回 映画『ゴッド・ファーザー』が伝える親族承継

『ゴッド・ファーザー』の示唆

1970年代を代表する映画『ゴッド・ファーザー』は、マフィアの世界を描いた不朽の名作です。その内容には『親族による事業承継』に向き合う上で重要な視点が描かれていると考えます。

1. 後継者を見極める代表者の苦悩

『誰』に後継を託すかは親族承継における要です。本作には後継者候補として、3人の息子が登場します。血気盛んな長兄、エンターテインメント業界に身を置いても芽が出ない気弱な次兄、そして本作の主役である、アル・パチーノ演じる三男『マイケル・コルレオーネ』

マローン・ブランド扮する『ドン・ヴェイトー・コルレオーネ』は高齢を迎え、長兄に全権を委譲しつつあるものの、彼の、時に激情的ともいえる冷静さを欠く言動には一抹の不安を抱えています。そのため内心では、冷静沈着にして才覚に富む三男のマイケルの後継が頭をよぎりますが、一流大学を卒業し海兵隊での活躍により士官候補となっているマイケルには、安定という未来を捨て

てまで、命さえ危ぶまれる後継を託すことに躊躇せざるを得ません。この心理は当センターで日々対応する親族承継相談においてよく見聞するケース（我が子の行く末を『家業』で縛りたくはないという代表者の思い）であり、代表者の苦悩を想起させる象徴的な事象です。スムーズな後継者の指名、育成には慎重性と計画性が求められることが肝要であると感じさせます。

2. 後継者の決断の重み

事業承継は後継者の決断なしには語れません。本作では一連の抗争により生死の境をさまようこととなった父親を見たマイケルは、命を賭して報復に向かうことを決意します。

長兄らは、「エリートのマイケルには無理なこと」と一笑に付しますが、「自分であるからこそ相手は気を緩める。それが絶好の機会だ」と、自らの手を汚さなければ保証されたであろう未来を捨て『家族』を守るために報復を実行に移すのです。「家族と時を過ごさない男は決して本物の男ではない」という父親の教えを思い起こし自身の行動を決断するシーンは、後継者としての並々なら

ぬ決意を感じさせます。親族間の承継では、後継者は自身の立場を理解し、スムーズに承継が成されると連想しがちですが、親族であっても『以心伝心』は必ずしも通用しないこともまた事実です。『明確に伝える』ことが重要です。後継者の承継決断は、非常に重いのです。

3. 親族承継における課題

本作は、マイケルが正式にコルレオーネ・ファミリーのドンとなって幕を閉じます。物語を通して浮き彫りになるのは、『親族に対する深い愛情』と『ビジネス判断』のバランスです。親族に対する愛情とビジネス判断の利害は必ずしも一致しません。

「私情なんか挟んでいない。これはビジネスだ」マイケルが報復を口にした時に周囲にたしなめられた際に言い放ったセリフ。親族に対する愛情とビジネス判断のバランスは、親族承継の過程において複雑に交錯しながら、その『解』を求め続けることであるのかもしれませんが。

お問合せ先

福井県事業承継・引継ぎ支援センター

0776(33)8279